はじめに

リチャード・ティトマスは一九七三年四月六日に他界しました。本書は、彼がロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で長年行っていた入門講座の講義を編集したものです。最後の講義は、死の直前の三カ月で行われました。

講義は何年も行われましたが、毎年、内容は改められました。新しい資料が加えられ、古い資料は削除されました。講義全体が完全に組み替えられたことも、書き改められたこともありました。本書は、彼の講義録を編集したのですが、実際に行われた講義そのままの記録ではありません。彼の発言はほとんど、注意深く準備された逐語草稿に基づいていますが、生き生きとした例示を与えるための臨機応変の発言で、注釈の形をとったものもみられます。そうした発言の趣旨は難なく推測できますし、彼が述べたであろうことの大意を伝えるために挿入した部分もあります。本文ないし脚注に組み込むのが適切と思われる補助的な切り抜きが、講義の草稿と同じファイルに収められていることも多くみられました。

編集は最小限にとどめています。音楽の調べを思わせるティトマスの文章に手を入れてみようなどという、厚かましさをもちあわせた人がいるとは思えません。私たちが行ったことは、これが書物となった時に、読者にはわずらわしく感じられる一人称表現を取り除いたことぐらいです。実際、自分の講義を出版するときに、彼はいつもそうしていました。「私は…と思います」という句をいくつか削除したために、実際の講義よりもいくぶんお説教じみてうけとられる部分があることは否めません。また、特に第一回の講義でそうでしたが、時たまみられる内輪の発言を削除しました。例えば、LSEで行われている他の講義と自分の講義との関連とか、同僚や他学部等に言及した部分がありますが、これらは一般の読者にとっては意味のない発言といえましよう。

本書の章立ては、実際に行われた講義とは順序が違っています。主題の違いが明確になるような配列にいたしました。ティトマスは、五〇分きっかりの講義時間で一つのテーマを語り尽くすことは難しいとよくこぼしたものです。実際には、自分で区分けした通りに講義をすることは、ほとんどありませんでした。事例を用いたり、質問に答えたりするのに、予想外の時間がかかったのです。一九七三年に計画ないし実施された八回の講義では、本書の第七章及び第十章は、実際には行われていません。

ティトマスの諸著作は、アメリカ合衆国やその他の国々で、広く読まれています。ですから、北アメリカやその他の国々で社会政策を学ぶ学生の方々にイギリスの制度を理解していただけるように、特に注意を払いました。

この講義が入門講座であったことをここで強調しておきたいと思います。この分野に親しんでいる人ならばよく知っているはずの文献をていねいに説明しているのは、そのためです。ティトマスの他の著作に比べると、引用や要約や説明文がより多くみられますが、その一方で、彼のどの著作にも劣らず、本書は洞察力に満ち、かつ、深い思考を誘うものになっています。

私たち編者は、言葉を言い換えたり削除したり編成しなおすことはできても、なにかを付け加えることはできませんでした。むしろ、それは誤りであると言えましょう。彼が自分で本書の出版を準備したとしても、私たちにこの講義に必要なものは何かと尋ねたとすれば、本書の統一性を一層強固にするために、第二章の最後で述べられている社会政策モデルについて、もっと多くを語ってもらいたいと要望したことでしょう。現在のところ、これらのモデルの取り扱いには不均衡がみられます。モデルA、すなわち、残余的福祉モデルについては多くが語られていますが、他の二つのモデルに直接言及した部分がほとんどありません。この点で、本書はいくぶん未完成のものであります。

本書の最後に「終わりの言葉」としえ掲載した文章は、一九七三年の講義の冒頭で、年度の前半に予定したこの講義を後半に行うことになった理由を、彼自身が述べたものです。この文章を冒頭に掲げてしまうと、本書の印象が悪くなったかもしれません。これは、テイトマスが書いた最後の文章です。私たちがこの文章を掲載することにしたのは、ひとつは感傷的な理由からであり、いまひとつは、彼のどの著作よりも彼自身の個人的な側面を伝えているからである、と告白しておきたいと思えます。それは、また、お別れにあたっての励ましの言葉でもあります。死を迎える前の最後の数カ月間、テイトマスは、(私たちにさらなる研究努力を求めています)自分の研究や他の多くの人々の研究が無駄ではなかったと感じておりました。彼が自分で経験したように、イギリスの国民保健サービスは、彼が情熱を傾けて信じていた道德上の諸原則を実践していたのです。

参考文献を探し、それを点検して下さったハリオット・ブレサートンさんにお礼を申し上げあげます。グレンナースター夫妻、アイダ・メリアムさん、オークレイ夫妻、デイビッド・ピアチャウドさん、そして、ガース・プライマンさんは、注意を込めて原稿を読んでくださり、最終的な校閲を行ううえで多くの貴重な意見を寄せてくださいました。それにもかかわらず、編集上の誤りがあるとすれば、すべて私たちの責任です。自分が書いたものの出版を許可するときのリチャードがいつもそうしたように、私たちは誠実であろうと努めました。

一九七三年一二月
ブライアン・エイベル・スミス
ケイ・テイトマス